

Title	ハーバート・ スпенサーにおける芸術と社会
Sub Title	Art and society sociology of art by Herbert Spencer
Author	山岸, 健(Yamagishi, Takeshi)
Publisher	三田哲學會
Publication year	1971
Jtitle	哲學 No.57 (1971. 3) ,p.137- 164
JaLC DOI	
Abstract	<p>In this paper I try to understand the main problems of theories of society and art in works written by Herbert Spencer (1820-1903). He was really a man of Victorian England. The Victorian Age was the 'age of coal and iron' or 'the Railway Age' and it was characterized by constant and rapid change in economic circumstance, social custom, and intellectual atmosphere, so the nineteenth century was an age of transition. We may find in his writings his attitude to his age and changing way of life in England. He once explained the aim of Sociogy (the Social Science) as follows : 'Sociology has to recognize truths of social development, structure, and function, that are some of them universal, some of them general, some of them special'. He thought that all social phenomena are phenomena of life. Also he regarded society as a growth and not a manufacture. He used next terms frequently and these may be called 'key terms' analyzing his theories of society and art. Some examples are as follows : Social organism, evolution, growth, development, structure, function, co-operation, consensus, class, the sustaining system, the distributing system, the regulating system, social metamorphoses, homogeneity, heterogeneity, differentiation, integration etc. For him the the law of progress or evolution is not only clearly exemplified in the evolution of the social organism, but also it is exemplified with equal clearness in the evolution of all products of human thought and action such as language, art, and science. Then he surveyed and traced such law or principle as differentiation and integration in various artistic phenomena, for example in artist, style and structure of works, interrelation between arts. He thought that 'in ancient Egypt, the priest was the primitive sculptor ; and the association of painting with sculpture was so close as to imply that he was also the primitive painter-either immediately or by proxy'. Or in another page we can find next passage. 'Along with differentiation of the lay painter from the clerical painter there began a differentiation of lay painters from one another.' In some articles he argued function of art and role of artist. Also he discussed distributing system of literary works, in another word ' book-distribution.' Here and above I can find main problems and methods of sociology of art, then Herbert Spencer may be called one of founders of so-called sociology of art, sociological or anthropological study of art.</p>
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00150430-00000057-0137

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

ハーバート・スペンサーにおける 芸術と社会

山 岸 健

- 1 はじめに
- 2 スペンサーの英国
- 3 社会の理論と芸術の理論
- 4 むすび

1 は じ め に

人間は思考する人であるとともに行為する人である。また、人間は演技する人であり、表現する人である。表現的シンボルの創造、伝達、享受の諸相を社会、文化、パーソナリティとの相互関係において解明することにより、生活体系の中にみられる芸術の位置と機能が理解されるであろう。芸術社会学においては、表現的シンボルの創造、伝達、享受をめぐるみられる諸現象を社会文化現象としての芸術現象とみなす。芸術現象を社会、文化、パーソナリティの構造と変動の中でとらえ、そこでの表現的シンボルの機能を明らかにする試みは、‘芸術と社会’に関する研究の基本的課題である。⁽¹⁾

ハーバート・スペンサー (Herbert Spencer, 1820-1903) の芸術に関する考察は、10巻に及ぶ「総合哲学体系」のうち6, 7, 8の3巻にまとめられた「社会学原理」(The Principles of Sociology, 1876-96)の中に集約的に認められるが、他の著作においても芸術に関する彼の所説は散見される。⁽²⁾ この小論では、芸術社会学理論史の一部としてハーバート・スペンサーにみられる芸術と社会の理論を考察し、彼の所説を芸術社会学の基本的枠組の

中に位置づけ、検討する。彼の社会学理論については、最も基礎的部分を解明し、それとの関連で芸術に関するスペンサーの所説を考察したい。スペンサーの社会学体系には、生活のきわめて多様な諸側面が含まれており、それら諸側面の統一的理解が、社会の発展、構造、機能という基本的原理に基いて行なわれている。芸術と社会に関する彼の考察もこのような立場で試みられている。

スペンサーの社会学の目標を知るためには、彼の残した次の一節が注目される。

生物学がすべての有機体を通じてみられる、またはある大部分のグループを通じてみられる、時にはそれらのグループに含まれるある従属的なグループを通じて認められる発展、構造、機能のなんらかの一般的諸特性を発見するように、社会学は、あるものは普遍的であり、あるものは一般的であり、さらにそれらのあるものは特殊⁽³⁾的といえるような社会的発展、構造、機能の真理を認識しなければならない。

スペンサーにとっては、社会学は、‘社会の科学’であった (the Social Science)。社会学の本質を明らかにするために一般的な意味での形態学と生理学との対応で、社会の形態学と生理学とが問題となり、個人有機体との類推において社会有機体の構造と機能とが究明される。このようにして社会有機体説の観点に基く社会研究が進められ、いわゆるスペンサー社会学の体系が築かれたのである。⁽⁴⁾

注(1) 芸術社会学の研究領域と基本問題については、次の文献を参照のこと。

拙稿 芸術社会学概観、哲学第48集、1966年3月；芸術社会学の基本図式、哲学第50集、1967年3月。

筆者は、芸術社会学を一般芸術社会学と特殊芸術社会学とに分け、後者には芸術の領域に対応するものとして、演劇社会学、映画社会学、文学社会学、音楽社会学、絵画社会学、彫刻社会学、建築社会学などの部門が含まれるものと見る。

スペンサーにおいては、職業的制度 (professional institutions) の問題と

して芸術家の地位及び役割、芸術家の分化が論じられている (H. Spencer, *The Principles of Sociology*, Vol. III, London: Williams and Norgate, 1896, Part VII).

- (2) スペンサーの芸術論は、次のような論文にも認められる。

The Philosophy of Style, The Origin and Function of Music, Gracefulness, Use and Beauty (H. Spencer, *Literary Style and Music: Including two short essays on Gracefulness and Beauty*, London: Watts & Co. (first published in the thinker's library), 1950 に所収)

The Sources of Architectural Types, Personal Beauty, A Theory of Tears and Laughter (H. Spencer, *Essays: Scientific, Political, and Speculative*, London: Longman, Brown, Green, Longmans, and Roberts, 1858 に所収)

- (3) H. Spencer, *The Study of Sociology*, New York: D. Appleton and Company, 1891 (*The International Scientific Series*, volume V.), p. 59.

- (4) 社会有機体に関するスペンサーの所説については、次の文献を参照のこと。
The Social Organism (first published in *The Westminster Review* for January 1860), この論文は次のテキストにそれぞれおさめられている, H. Spencer, *Essays: Scientific, Political, and Speculative* (second series), London: Williams and Norgate, 1863; *The Man versus the State: with four essays on politics and society*, edited with an introduction by D. MacRae, Published in Pelican Books 1969 (first published 1884, 1892).

H. Spencer, *The Principles of Sociology* Vol. I, London: Williams and Norgate, 1876, Part II *The Induction of Sociology*, II *A Society is an Organism*.

スペンサーは、社会の科学的概念について次のように述べている。

‘……これに反して社会は生長するものである (a growth). 過去のどんな教養も、また現在のいかなる教養も (ここで教養とは、スペンサーの用語で ‘the culture’) かなり多数の人々に対しこれまで社会についての科学的概念をなら与えてきていない。そのような社会の科学的概念によれば、社会には自然的構造 (a natural structure) がみられ、そこにおいては、政治的、宗教的、産業的、商業的等々のすべてのそれらの諸制度が相互依存的に結合されていて、その構造はある意味において有機的なのである’。

H. Spencer, *The Man versus the State*, edited by D. MacRae, published in Pelican Books, 1969, p. 147 (*The Man versus The State*)

スペンサーとダーウィン (C.R. Darwin, 1809-82) との関係についても考えなければならないが、この点については、次に紹介するマクレーの一節を

もってかえる。彼は、ダーウィニズムと社会科学という問題を考える場合、英国の学者として特にスペンサー、タイラー、(Sir E.B. Tylor, 1832-1917), フレーザー (Sir J.G. Frazer, 1851-1941), ホップハウス (L.T. Hobhouse, 1864-1929) の4名を典型として挙げる。

‘われわれが知っているとおり、スペンサーの生物学的理論と彼の宇宙進化についての見解はダーウィンから独立したものであり、しかもダーウィンに先行したものであった。しかしながら平行する点は非常に近いのでダーウィン派という名称の下に彼等を考えることは、理にかなったことである’。D.G. MacRae, *Ideology and Society: Papers in Sociology and Politics*, London: Heinemann, 1961, p. 130. (Chapter XI Darwinism and the Social Sciences).

次に機能主義の問題に関するマクレーの見解を示す。‘社会を機能的に分化した諸部分の相互依存的統一からなる有機体との対比で理解する有機体的類推 (the organic analogy) は、科学の歴史というよりむしろ保守的イデオロギーの歴史に属するようなものである。しかし、自ら進んで社会進化の諸理論を拒絶したような人類学者達でさえも特別な社会学的諸目的に応じて、機能及び機能的相互依存関係という考え方を全面的に採用し発展させたのであって、彼等は、このような考え方を社会構造の分析にとって必須の道具として使用した。この点においては、スペンサーは、ある程度、人類学者たちより先に立っているが、このことは、今日でさえ十分に知られることがない位である。それゆえ、機能主義は、ダーウィンの生物学よりもより多くスペンサーの哲学と社会学に根ざすものであろうが、それは進化論的伝統に深く根を下している’。ibid, p. 124.

2 スペンサーの英国

ハーバート・スペンサーは、1820年4月27日、英国のダービー (Derby) に生まれ、1903年12月8日、ブライトン (Brighton) でこの世を去った。彼は文字通りヴィクトリア女王の英国でその生涯を送ったことになる (Victoria, Queen, 1819-1901, 在位 1837-1901)。19世紀は、英国の社会及び文化の歴史において、著しい変化の認められた時期であり、この時代は、‘石炭と鉄の時代’、‘鉄道の時代’と呼ばれている (the ‘age of coal and iron’, ‘the Railway Age’ G.M. Trevelyan⁽¹⁾)。英国では、1830年から50年にかけての期間は、鉄道と蒸気船の時代であった⁽²⁾。いずれにせよ産

業革命は、英国社会の諸側面に深い影響を及ぼした。19世紀の英国は、恒常的な社会文化変動期にあり、産業社会の展開、都市社会の形成が次第にみられる社会であった。スペンサーは、技術の開発と応用の時代に生きていたわけであり、英国における地域構造と階層構造の変化を産業社会、都市社会の到来とその展開とを通じて眼のあたりに見ることができた。彼の多彩な著作活動を考える時、このような時代的背景は、特に重要な意味を持つ。

歴史家、トレヴェリヤン (G.M. Trevelyan) はヴィクトリア時代の素描を次のように行なっている。

大改革法案 (the Great Reform Bill) の年、1832年から19世紀の末にいたる期間は、いわば、ヴィクトリア時代と呼ばれるであろうが、この時代は、経済的状况、社会的慣習及び知的雰囲気にもみられる絶え間のない、かつ速い変化によって特徴づけられているので、この時期の60年以上が女王によって統治されていたからといって、この70年間を通じて固定した類似性が認められると考えるてはならない。もしなんらかの統一性が英国のヴィクトリア朝に帰せられるとすれば、それはふたつの支配的状态のうちに見出されなければならない。第一は、大きな戦い、外部からの破局の恐怖がなかったということ。第二には、この時代を通じて宗教的問題についての関心がみられ、この時代全般が、ピューリタンのエートスに由来する人格の自己陶冶、まじめな思考によって深い影響をうけていたからである。⁽³⁾ ……

ヴィクトリアの英国は、ふたつの鮮かな対照を示す社会のシステムから成立していた。それは、農村地域の貴族的英国と大都市の民主的英国である。諸州と商業の町々は、なおすべての階級が従っていた地方のゼントルマン (country gentlemen) によって統治され、裁かれていた。しかし、諸都市は、中流階級であれ労働者階級であれ本質的には民主的な非常に異なる社会的な諸価値の尺度に従う全く別なタイプの人により治められていた。

経済的要因と移動の進歩により、町の新しい社会は徐々に地方の古い社会に侵入しつつあり、ついに20世紀にいたると、都市的思考、理念、統治が田舎そのものを征服した。しかしながら、それは長時間にわたる過程であった。19世紀は移行の時代であった。⁽⁴⁾

スペンサーの英国をこのような形式でとらえ、彼の著作を検討すると、彼の時代に対する洞察がよくうかがえる。彼は英国の経済的構造、政治的構造に認められる変化の過程に、注意を払い、変りつつある社会を究明したのである。彼においては、社会の構造と機能は、社会の科学的研究のための基本的問題であったが、筆者の考えるところでは、彼の問題意識は、まず社会の進化、発展の問題に基いていたといえよう。それ故、社会の進化、発展の基本的形式が解明されるべきであった。この問題は、社会構造の複合的变化、同質的なものから異質的なものへの変化、分化と統合という観点において論じられたわけである。

スペンサーの社会学体系を理解するためには、特に次の用語は鍵言葉として重要な意味を有する。

social organism, evolution, progress, growth, development, structure, function, social metamorphoses, differentiation, integration, sustaining system, distributing system, regulating system, institution, co-operation, consensus etc.

社会の構造的変化は、基本的に進歩、発展の方向性を有する社会的変形 (social metamorphoses) とみなされたが、周知のとおり軍事型社会から産業型社会へ (from militant society to industrial society) の発展図式が、これらの諸問題との関係で理解されるであろう。社会有機体説の立場を考えるなら、上記の 'growth' という言葉は、もちろん発展ないしは進歩という意味にも理解されるとはいえ、'生長' '発育' という用法においても考慮されるべきであろう。スペンサーの場合、用語の由来とそれらの意味領域の検討も欠かせられないのである。

彼はいわゆる生物有機体(彼自身は、個人有機体 ‘individual organism’ という表現をとる)との類推で社会有機体の概念構成を行なっているから、ここに比較の一例がみられる。この比較のとり方は、いうまでもなく彼にとっては、決定的な意味を持っていた。社会の発展のとらえ方は、例えば、前述の軍事型社会と産業型社会という形式で述べられることもあれば、未開社会と文明社会 (example: aboriginal societies & large civilized nations⁽⁶⁾ etc.) のごときフォームの比較的方法で論じられる場合も認められるが、このような思考方法にわれわれは、いわば、スペンサーのいう ‘比較社会学’ (‘Comparative Sociology’⁽⁶⁾) の立場を見出し得るのである。

次に進歩 (progress) に対する彼の論述をみよう。それは、連続的分化を通じて単純なものが複雑なものへとかわる進化の論理であり、同質的なものが異質的なものへと変形する進歩の論理に帰結するものである (evolution of the simple into the complex, through successive differentiations; transformation of the homogeneous into the heterogeneous).

さて、われわれはまず第一にこの有機的進歩の法則 (law of organic progress) が、すべての進歩の法則であることを示したいと思う。連続的な諸分化を通じてみられる単純なものから複雑なものへというまさにこの進化 (evolution) は、大地の発展 (development) においてであろうと、地上で生活する生物の発展においてであれ、社会、政府、手工業、商業、言語、文学、科学、芸術の発展の場合であっても、普遍的に認められる。最も初期の知られている宇宙上の諸変化からごく最近の文明の諸結果にいたるまで、われわれは、同質的なものから異質的なものへの変形には、進歩 (progress) が本質的に存在することを見出すであろう⁽⁷⁾。

スペンサーは、芸術を含めてあらゆる分野に進化の法則が貫徹しているとみるが、ここにいたると、彼の考え方は、進化の哲学というべきものとなっている。彼においては、未開の諸部族 (barbarous tribes) は、社会の最初のかつ最も程度の低い形態であり、そこでは個人は同じような力と機

能を有し、同質的な集合が認められる。そこでみられる唯一の機能分化といえ、性別によるものである。やがて第二次的な分化が進む過程において、コミュニティを構成する人々の群は、明確な諸階級及び種々なる労働者の諸階層へと分離してきているという (differentiation & segregation)⁽⁸⁾。ここで分業が問題となることは、いうまでもない。前掲のスペンサーの論述でも明らかであったが、このような進化の法則は、単に社会有機体の進化において認められるのみならず、‘具体的なものであろうと抽象的なものであろうと、また現実的なものであろうと理想的なものであろうと、いずれにせよ人間の思考と行為 (human thought and action) のすべての所産の進化’⁽⁹⁾ において等しく明瞭に認められるものであった。

進化の法則が芸術の領域でみられる場合、それは、芸術の諸領域の漸進的分化、芸術作品の主題の多様化、作品の構造に認められる異質性への移行という形式をとる。例えば、彫刻の場合では、同質的なものから異質的なものへの推移は、左右相称というパターンから左右非相称というパターンへの変化の過程において見出される。これらの諸形式は基本的にいずれも同質的なものから異質的なものへという分化の原理に従っている。音楽では、この原理は、楽器、メロディ、ハーモニーのそれぞれの面で認められる。

スペンサーは、青年時代の一時期を鉄道技師として過した。1837年のことである。彼はバーミンガムグロスター鉄道 (the Birmingham and Gloucester railway) の技師としてこの鉄道の完成する 1841 年までその職を勤めた。彼自身の生活史のこのような一断面を考えた場合、‘鉄道の時代’の影が市井の一個人であったスペンサーにいかにも象徴的にさしているように思われる。そして彼はこの鉄道の時代において、生活の諸側面にさまざまな変化が生じている事実を認め、それを次のように表現している。

ところで、蒸気力の最近の具体例といえる機関車のエンジンに眼を向けてみよう。これは、わが国の鉄道のシステムをつくりあげるのに最も

大きな力となったものであるが、この蒸気機関車は、国土の表面、交易のコース、人々の諸習慣を変化させてきている。……

同時に旅行の習慣が、非常にひろまった。それまで旅行など思いもよらなかった階級の人々まで毎年、海へ小旅行を企てる。また、遠方の親類を訪ねる。遊覧旅行を行なう。その結果、われわれは身体のためにも感受性や知性の点でも多くの利益をうけている。さらにニュースや手紙類のより敏速な伝達がさらに種々なる変化をひきおこし、国家の鼓動をよりすみやかなものとしている。そのうえ、鉄道の本の売店を通じての安価な文学作品の普及や客車にみられるさまざまな広告の活用が広範囲にわたって生じている。それらのいずれも今後の進歩を促がすであろう。社会有機体は、新たに生まれた多くの職業の影響をうけてより異質的なものに変えられてきているし、多くの古くからある職業は、一層専門化されてきた。また土地の値段も変えられてきた。商人はいずれも、多少とも商売のやり方を変えてきている。そして、行為、思考、情緒の種々なる面で、影響をうけていないような人は、まずいない⁽¹⁰⁾。

このようなスペンサーの叙述は、‘石炭と鉄の時代’を迎えた英国人の生活の断面を描いて鮮かである。この一節は、産業革命の影響の広さと深さ、速さをうかがい知ることのできる文章というべきであろう。このような変動期の生活を体験したスペンサーの社会の理論は、変化しつつあった当時の英国社会の構造、及び社会発展の方向性を探求する態度に支えられたものと見るべきではないだろうか。ここにわれわれは、スペンサーにおける‘発展の社会学’⁽¹¹⁾ (sociology of development) という一面を発見できるであろう。

ところで、スペンサーは、どのような歴史観をいだいていたであろうか。次にこの点について考えてみたい。彼は、社会は超自然的なものでもなく、また特定個人の意志によって決定されるのでもなく、一般的な自然的諸要因に基づく結果であるとし、これを知るためには、周辺で進行しつつある

諸変化を見たり，社会組織 (social organization) の主要な特徴を観察すればたりるという。スペンサーは，英国各地に見られる産業を次のように指摘する。

Lancashire—cottonfabrics, Yorkshire—woollens, Staffordshire—pottery, Sheffield—cutlery, Birmingham—hardware.

木綿，毛織物，陶器，刃物，金物鉄器などの産業の地域的分散に注目した彼は，ここで次のように述べている。

これらは，英国社会の構造 (structure of English society) に認められる大きな諸事実である。しかしながらこのような諸事実は奇跡，立法のいづれにも帰せられない。⁽¹²⁾

彼によれば，このような産業組織が現にみられるような状態にいたったのは，立法的指導なしにではなく，立法上のさまざまな障害にもかかわらず，なしとげられたものであり，人々の諸欲求の抑圧，及びその結果として生まれた諸活動によってかかる産業組織が生じてきているという。産業の立地，配置は，スペンサーにあっては，維持のシステム (the sustaining system) という形式で問題となる (The Principles of Sociology, Vol. I). 鉄道の普及，発達，分配のシステム (the distributing system) との関係でも論じられる。彼の社会学体系にみられるこのようなシステムの概念が，英国社会の産業構造と鉄道の普及という社会的事実にも依っていることに注目すべきである。

ところでスペンサーの歴史観は，次のようなかたちでも展開される。彼はクロムウェル (Oliver Cromwell, 1599-1658) の例を挙げる。クロムウェルは新しい社会状態を永続的にうちたてようとつとめたが，そのクロムウェルの失敗，彼の死後に見られた抑圧されていた諸制度，諸慣行の急速な復活，こうした事実は，一人の指導者が自己の統治する社会のタイプを変えるのにいかに無力であったかを示しているとスペンサーは述べている。

クロムウェルは，組織の自然的過程 (the natural process of organi-

zation) を妨げたり、遅らせたり、助けたりできるかもしれない。しかし、この過程の一般的コースは、彼の統制を越えたものである。それのみならず、真実はいかにとどまらぬ。種々なる社会のさまざまな歴史をその社会にみられる偉人達の歴史とみなし、これらの偉人達が彼等の社会の運命を形づくると考える人々は、このような偉人達が彼等の社会の所産であるという真実を見逃してしまう。もしもある種の先行者がいなければ、また、ある平均的な国民性⁽¹³⁾ (national character) がみられなかったとしたら、彼らは生じ得なかったであろうし、彼等を形づくった教養⁽¹⁴⁾ (the culture) を彼等は持ち得なかったであろう。たとえ彼等の社会がある程度彼等によって再度、形づくられるものとしても、生まれる以前も生まれて以後も、彼等は彼等の社会によって形づくられたものであり、いわば、彼等は、彼等がうけついでいる先祖伝来の性格をはぐくみ、また、彼等自身の幼少時の性癖、彼等の信条、道徳、知識、大望をつくり出したすべての諸影響によって形づくられたものであった。異常な力を有する諸個人に直接帰せられるような種々なる社会的変化といえども、このような次第により、かかる諸個人をつくり出した社会的諸要因になおもはるかに跡づけられる。それゆえ、高所からみるなら、このような社会的諸変化もまた、一般的な発展過程の諸部分なのである。

かくして、社会の産業構造にとって自明な真理といえるものは、社会の全体的構造についても真実である。「諸組織はつくられるのではなく、成長する」(‘constitutions are not made, but grow’) という事実は、すべての社会の諸相において、またすべての社会の諸分枝を通じて、社会は成長するものであり、つくられるものではない (society is a growth and not a manufacture) というのはるかに大きな事実の単に一断片にすぎぬ。⁽¹⁵⁾

われわれは、スペンサーのこのような論述において、彼の歴史観及び社会観の一面を知ることができる。政治や経済の領域に認められる彼の放任

主義 (laissez faire) の立場もこれらの所説の中に部分的にうかがえるであろう。自由、平等、個人に対する彼の深い関心を考えてみるべきである。社会と個人有機体の比較を試みる時、彼によれば、主要な四点の差異が存在するが、第四の差異についてスペンサーは、次のように述べている。

最後のおそらく最も重要な区別は、動物の身体においては、たんに一つの特異な組織のみが感情 (feeling) を与えられているのに対し、社会においては、すべての成員に、感情が賦与されているということである。⁽¹⁶⁾

軍事型社会が力によって保障された協同に基づく社会であるのに対し、産業型社会にみられる協同は、任意的、自発的な性格を持つ。後者の社会では、いわば、強制や統制は最少限度のものとなる。ここでは、個人の存在価値が強調される。スペンサーの歴史観及び社会観を全体的にとらえた場合、最終的に残るのは、個人と社会の問題であることは、否定できないであろう。彼は、社会において個人はいかに存在し得るかということをも考えていたといえよう。それゆえ、彼の社会学は、たんに社会の社会学ではなく、‘社会と個人の社会学’である。

言葉は、一つの社会的事実である。石炭、鉄、鉄道といった言葉が今日有する響きと、これらの言葉が19世紀において含んでいた響きとは、当然異なるものがあるだろう。スペンサーの英国においては、これらの言葉はおそらく新鮮なものとして、時には時代の象徴として人々に訴えたであろう。社会の構造も意識の構造も変りつつあった。生活が構造的に変化することをスペンサーと同時代の人々は多かれ少なかれ感じたにちがいない。‘行為、思考、情緒の種々なる面で、影響をうけていないような人は、まずいない’という彼の言葉に当時の生活の中で見られた変化を認めることができよう。この変化は急激にかつ短期間に、また一部の範囲においてのみ生じたとは見られず、徐々に長期間にわたり広範囲の生活領域で生じたものというべきである。このような変化の進行過程は、革命 (revolution) という言葉ではなく、展開 (evolution) という言葉で表現されるべきである。

う。

自然、文化、社会、個人という四個の言葉は、社会文化現象たる生活体系⁽¹⁷⁾の理解にあたり最も重要な位置を占める。これらの用語にみられる社会的背景及びこれらの言葉に対する人々の対応の仕方（いわば、価値—態度の問題）をわれわれは考えなければならない。スペンサーの英国に生きた人々は、果してどのような自然観ないし社会観を有していたであろうか。スペンサーの社会学の諸理論は、‘鉄道’の時代あるいは、蒸気力の時代に生きた彼の生活経験に支えられた社会観であるとも考えることもできるであろう。

スペンサーは、あるところで次のような文章を残している。

いかに生きるか？これがわれわれにとって本質的な問である。たんに物質的な意味においてのみではなく、最も広い意味においての生き方が問題なのである。それぞれの特殊な問題を含む一般的な問題は、すべての諸環境ですべての諸方向において行為 (conduct) を正しくおさめることである。⁽¹⁸⁾

彼は、また以下のようにも述べている。

すべての社会現象は、生活の現象であり (all social phenomena are phenomena of life) —生活の最も複雑な表明であり— 生活の諸法則に従わなければならない—そして生活の諸法則が理解される時にのみ理解され得るのである。⁽¹⁹⁾

スペンサーの論述の中にかかると一節が認められることは、注目されてよいであろう。確かにわれわれにとって最も大きな問は、いかに生きるかということであろう。環境への適応なくしては、生きることはできない。マッハイムの表現を借りれば、この環境は、いわば、心理的社会的制度的環境⁽²⁰⁾とみることができ、これに加えて自然的環境を考慮すべきである。人間は環境に適応しながら行為し、思考し、対象を眺め、感じ、表現し、また演技し、このようにして生きている。シンボルを媒介としたコミュニ

ケーションの有する意義は、あらためて指摘するまでもないであろう。社会と芸術の問題の出発点は、まずこのような事実に求められるのである。

注 (1) G.M. Trevelyan, *English Social History*, Pelican Books, 1967, first published in the U.S.A. & Canada by Longmans, Green 1942, first published in Great Britain 1944, p. 544.

(2) D. Thomson, *England in the Nineteenth Century <1815-1914>*, first published in Penguin 1950...1969, p. 41.

(3) G.M. Trevelyan, *ibid*, p. 522.

(4) G.M. Trevelyan, *ibid*, p. 540.

(5) H. Spencer, *The Man versus the State*, Pelican Classics, 1969, p. 202 (*The Social Organism*).

(6) H. Spencer, *ibid*, p. 167 (*The Man versus the State*). 記述社会学 (*Descriptive Sociology*) と比較社会学 (*Comparative Sociology*) については、次の文献を参照せよ。

H. Spencer, *Essays on Education*, Everyman's Library 504, introduction by C.W. Eliot, London: Dent, New York: Dutton, first included in Everyman's Library, 1911, last printed 1966 (original edition, *Education*, 1861) p. 29 What Knowledge is of most Worth?, これは雑誌論文である, *The Westminster Review*, July 1859)

(7) H. Spencer, *Essays: Scientific, Political, and Speculative*, London: Longman, Brown, Green, Longmans and Roberts, 1858, p. 3 (*Progress: Its Law and Cause*)

(8) H. Spencer, *ibid*, pp. 11-14, (*Progress: Its Law and Cause*)

(9) H. Spencer, *ibid*, p. 15 (*Progress: Its Law and Cause*)

(10) H. Spencer, *ibid*, pp. 48-50 (*Progress: Its Law and Cause*)

ここで引用した彼の所説とほぼ同様な表現で機関車のエンジンの発明による諸影響や鉄道建設に伴う諸変化を述べた論述は、次の文献においても見出される。

H. Spencer, *First Principles of a New System of Philosophy (A System of Synthetic Philosophy Vol. I.)*, New York: D. Appleton and Company, 1876 (first published, 1862), pp. 454-5.

ここで示したようなスペンサーの諸影響についての考え方は、‘影響の増殖’ (*the multiplication of effects*, *First Principles of a New System of Philosophy*) という彼の原理に基いたものである。

(11) スペンサーの問題意識の中心的領域に進化及び発展の基本的形式の解明を認めることができるが、彼は比較社会学の方法によって、これを試みた。

彼は、時間的、空間的諸領域に見られる種々なる事例の比較を行ない、分化と統合の過程を含む社会文化現象の進化的発展のメカニズムを究明した。

今日、発展の社会学は、筆者の見るところでは、社会学と人類学（社会人類学、文化人類学）の接点で進められる注目さるべき研究領域となっているが、スペンサーの社会学体系の中に、発展の社会学とみなしてよい一面が認められることは、今日の時点におけるスペンサーの評価として考慮さるべきであろう。発展の社会学については、次の文献にも見られる。

J.E. Goldthorpe, *An Introduction to Sociology*, Cambridge at the University Press, 1968, p. 110.

スペンサーは、社会学の体系を構成したが、彼の社会学体系に、いわば人類学的観点が含まれていることは、確かである。

- (12) H. Spencer, *Man versus State*, p. 196 (*The Social Organism*)
- (13) ここでの国民性とは、国民一般に普遍的な先祖伝来の資質、性格を指すものと解される。もちろん、今日、使用される国民性と全く同一の意味で、この用語をスペンサーが使用したとはいえないが、彼が上記のような意味で‘国民性’という言葉を使用している事実に筆者は、注目したい。
- (14) スペンサーの著作で使用されている‘culture’という言葉が、果してどのような意味で使用されているかは、考えたい問題である。筆者の見るところでは、彼は、多くは‘教養’という意味でこの言葉を使用しているものといえよう。

‘culture’という言葉が18世紀から19世紀にかけての英国社会の背景との関連で考察したウィリアムズの研究は、注目される。

R. Williams, *Culture and Society 1780-1950*, (a Pelican Book) Penguin Books, 1961 (first published by Chatto & Windus, 1958)

- (15) H. Spencer, *The Man versus the State*, p. 198 (*The Social Organism*)
- (16) H. Spencer, *ibid*, p. 205 (*The Social Organism*)
- (17) 筆者の考える‘生活体系’とは、生活基盤、生活理念、生活様式、生活景観の諸領域をもって構成される概念である。
- (18) H. Spencer, *Essays on Education* (Everyman's Library 504), introduction by C.W. Eliot, p. 6 (What Knowledge is of most Worth?, これは次の雑誌論文である。 *The Westminster Review*, July 1859)
- (19) H. Spencer, *ibid*, p. 30 (What Knowledge is of most Worth?)
- (20) K. Mannheim, *Systematic Sociology*, edited by J.S. Erös & W.A.C. Stewart, London: Routledge & Kegan Paul, first published 1957, third impression 1967, p. 8.

3 社会の理論と芸術の理論

スペンサーは‘社会的発達 (social growth) 及び種々なる構造の発生、そしてそれに随伴する諸機能は、社会の科学 (Science of Society) にとって主題となる⁽¹⁾’と述べている。さらに続けて彼は次のように説く。

この科学の領域をかように考えた上で、さまざまな初歩的社会 (rudimentary societies) を相互に比較したり、またこれらの社会を異なった進歩の段階にある諸社会と比較した結果、それぞれの社会には、実際ある共通の発展 (development) の諸特徴とともに構造及び機能についても共通の諸特性が見られることがわかった。さらに同様にして比較が試みられたところ。この科学の部分を形成する、社会的発達と組織の関係 (the relation between social growth and organization) というような大きな問題が生じた。⁽²⁾

この一節で使われている組織という言葉は、彼が別のところで使用している構造という言葉におきかえられるものである。彼の論法に従うと、構造と発達 (structure & growth) の問題は次のような形式で論じられる。いずれも、社会有機体と個人有機体の類推に基づく考え方であり、この両者の有機体に共通に認められる基本的特徴である。1. ある時点にいたるまで、発達にとって構造は必要なものである。2. 連続的な発達には、構造の破壊と再構成が含まれる。3. 構造が完成すると、成達は阻止され、社会が到達したタイプにその社会は固定される。⁽³⁾ 彼にとっては、この1と2は明らかなことであるとみなされたが、3は、考慮すべき問であるとされた。しかし、これらの論点は、いずれもスペンサー自身にとっては、社会の科学の基本的な問題であったというべきである。それは、彼の残した次の一節に明瞭に認められる。

社会における構造と発達 (structure and growth) の関係はどのようなものか? どのような時点にいたるまで、発達にとって構造は必要か?

どのような時点を過ぎると、構造は発達を遅らせるか？どのような時点において構造は発達を阻止する⁽⁴⁾か？

ここで指摘された構造と発達に関連性は、スペンサーの所説の中でも特に注目すべき部分であり、発達、発展、進化の原理に対する彼の深い関心を示すものである。

スペンサーが個人有機体と社会有機体との類推を行なう以前にも、プラトン (Platōn, B.C. 427-347) やホッブス (Thomas Hobbes, 1588-1679) などにこのような類推的叙述の例を認めることもできる。しかし、スペンサーの社会の理論は、あらゆる意味でこの類推に基づいたものであった。社会有機体と個人有機体の類似点は、1. 小さな集合体として始まり、量的に増大し、2. 最初は、構造を有しない (structureless) と思われるほど構造が単純であるのに、発達 (growth) の過程で、構造は連続的により複雑なものとなること、3. 未発達の状態においては諸部分間の相互依存はほとんどみられないが、それらの諸部分は次第に相互依存の関係を有するにいたり、この傾向は益々進み、ついには各々の部分の活動と生活は、他の部分の活動と生活によってのみ可能となること、4. 社会の生活は、その構成単位のいずれの生活よりもはるかに長く続くものであること、これら4点の有機体の特徴に求められた。ではこれら両有機体の相違点は何か。1. 社会には独自のフォームが見られない、2. 個人有機体を構成している生活組織は、連続的に増大するが、社会をつくり上げている生活している要素 (つまり、個人) には連続的な量的拡大は見られず、地球上のある部分にわたり多少とも広範囲にわたり分散している、3. 個人有機体の場合には、その究極的な諸要素は、相対的な位置において固定されているのに対し、社会有機体の構成要素たる個人は、場所の移動が可能である、4. 動物の身体にはただ一つの感情をそなえた組織しかないのに対し、社会を構成する全成員は、感情を有する。この4点の相違点が彼によって指摘され、特に第4点が重要とみなされる⁽⁵⁾。しかし、このような両有機体間の差異

は、それぞれの有機体にみられる発達段階を考えることにより縮小される。それ故、彼は、‘組織の諸原理は全く同じであり、相違点は、たんに適用の差異にすぎぬ’⁽⁶⁾と説く。彼は別のところでは、‘社会とそれとは別な物との間に見られる唯一の考えられる類似は、諸構成要素の配列に認められる原理の対応に従う類似であらねばならぬ’⁽⁷⁾と述べている。ここでは、社会はあたかも物として扱われる (society as a thing)。

「社会学原理」(The Principles of Sociology)に見られるスペンサーの論述を要約すれば、次のようになる。A. 有機体は発達する (grow), B. 規模が拡大するに伴い、構造も複雑になる、つまり分化 (differentiation), C. 構造の進歩的分化は、機能の進歩的分化を伴う、D. 諸部分間の相互依存性が見られる、分業、E. 全体の統一、まとまりを有する全体社会の生活の連続性 (continuity of life), F. 諸部分間の凝集性 (coherence) は、個人有機体の生活が営まれるための協同 (co-operation) にとって必要条件である、社会有機体の成員は、具体的な全体を形成しないが、彼等は、直接、個人から個人へ伝えられる身体的影響⁽⁸⁾によっては協同を維持できない。ここでスペンサーは次のように述べる。

しかし、社会の成員は、他の方法により協同を維持できるし、また事実協同を維持している。接触しなくとも、彼等は情緒的な言語や、語られたり書かれたりした知的な言語により、妨げとなっている空間を越えて実際に相互に影響を及ぼし合うのである。⁽⁹⁾

こうして組織を構成する諸部分の相互依存関係は効果的にうちたてられ、社会的集合体 (the social aggregate) は、生活する全体となると彼はいう。われわれは、スペンサーが、このような論点において、言語とコミュニケーションの問題に触れていることに注目したい (emotional language & language of the intellect)。彼の芸術の理論は、コミュニケーションと芸術という点においても認め得る。

スペンサーにとっては、美的教養 (aesthetic culture) は、他の種々な

る社会文化現象との総体的関連性において位置づけられるが、これは、彼の記述社会学 (Descriptive Sociology) の考え方との関係で理解される。彼は次のように述べる。

実用的な価値を有する唯一の歴史は、記述社会学と呼ばれるものである。歴史家が果し得る最も高度な職務は、比較社会学 (Comparative Sociology) に対し、かつそれに引き続いて生ずるのだが、社会現象が従う究極的諸法則の確定に対し、さまざまな素材を提供し得るように諸国家の種々なる生活を物語るといふ職務である。⁽¹⁰⁾

社会学と歴史学に対する彼の論述をここに見出すことができるであろう。‘われわれにとって実際に関心となる知るべき事柄は、社会の自然史 (the natural history of society) である’⁽¹¹⁾と彼は述べ、ある国家がどのようにして発達し、どのようにそれ自体を組織したかを知る手助けとなるすべての諸事実の必要が説かれる。これらの諸事実には、中央政府、地方政府に関する事柄、教会の統治、階級に認められる種々なる統制、社会生活の諸慣習、神話等の迷信の類、さらに産業のシステム (the industrial system)、産業の分野にみられる技能、知的状況、美的教養の程度、人々の日常生活の素描、すべての諸階級に認められる理論的ないし実際の諸道徳、が含まれるものとされ、これらの諸事実は、‘諸事実が総体的に (in their ensemble) 理解され、一つの大きな全体の相互に依存する諸部分として熟考されるように’まとめられ、整序さるべきであると説かれる。ここにわれわれは、社会文化現象の全体的総合的把握の立場を認め得る。ここで意図されるのは、‘どんな社会現象が他のどんな社会現象と共存するかを学ぶ観点で、社会諸現象にわたって存在する一貫性 (consensus) を人々が容易に跡づけ得るように’諸事実を示すことである。引き続く諸時代についての同様な立場に基く描写は、‘いかにそれぞれの時代の信念、制度、慣習、整序 (belief, institution, custom, and arrangement) は、変えられたか、また先行す

る時代の諸構造及び諸機能の一貫性が、どのようにして発展し、やがてそれに続く時代の一貫性を生み出すにいたったか⁽¹²⁾を示すように為されるべきであると述べられる。

スペンサーのいう美的教養は、建築、彫刻、絵画、服飾、音楽、詩、小説において示されるものであるが、上述のような社会現象の全体的統一的理解の一部として芸術の諸領域が位置づけられていることは注目されてよい。芸術の問題は、彼にあっては、生活の水準で論じられるものであり、それは、社会現象としての芸術という観点に基づいて究明される課題であった。「第一原理」及び「社会学原理」を中心とし、その他の諸論文で論じられている彼の芸術の理論は、他の社会現象との比較において、また時にはそれらの諸現象との関連において、述べられていることが多い。彼の立場を考えるなら、社会現象の総合的理解と社会現象にみられる基本的原理及び一般的法則の解明のために芸術の諸相を追求する必要は認められるし、また芸術の理論においても社会の科学の究極的法則と根本的原理が見出されるという彼の論法は考えられるところである。彼の種々なる論述を考えるにあたっては、「第一原理」に見られる次の一節を考えておかなければならない。それは、進化の定義とその形式を論じたものである。

進化とは、事象とそれに附随する動作の統合されたものであり、進化の過程においては、事象は、不明瞭で首尾一貫性を欠く同質性から明瞭で首尾一貫性を有する異質性へ移行する。そしてその過程において、持続された動作はこれと同様な変化をうける⁽¹³⁾。

進化においては、事象も動作も変化を示すが、その変化にはかような形式が認められる (an indefinite, incoherent homogeneity to a definite, coherent heterogeneity) とされ、社会現象を含む広範囲の諸現象にわたり、かかる定式の適用と発見が試みられたのであった。芸術の諸領域においても同様であった。

以上のような定式と社会の理論との関係における芸術の理論の細部にわ

たる考察は、次の機会において述べることとし、今回は、最後に生活における芸術の位置づけという点に焦点を絞ることとする。

スペンサーは、‘人間生活を構成する主要な活動の種類を重要度に従って分類する’試みを述べるが、‘第一は、自己保存に直接的に貢献する諸活動であり、第二は、生活の種々なる必需品を獲得することにより間接的に自己保存に貢献する諸活動であり、第三は、子孫の養育と訓練を目的とするような諸活動である’。彼の挙げる‘第四の活動は、独自の社会的政治的諸関係の維持に包括される諸活動であり、第五は、種々なる趣味及び感情の充足に捧げられた、生活の余暇部分を満たすような種々なる諸活動である⁽¹⁴⁾’。

人間の生活を形成する諸活動は、スペンサーによってこのようにまとめられた。彼によれば、芸術活動は、生活の維持にまず必要な諸活動を前提とし、かかる諸活動の達成にともない、生活の前面に現われる。

もしも絵画、彫刻、音楽、詩、それに各種の自然美によって作り出される種々なる情緒がなかったとしたら、生活の魅力はなかば失われてしまうだろう。……

しかしながら美的教養 (aesthetic culture) を人間の幸福にとって非常に有益であると認めたり、またそれが人間の幸福にとって基本的に必要なものであると認めるべきである。だが、美的教養がいかに重要であろうと、それは、直接、日々の仕事を支えるような種類の教養に従属しなければならぬ。前に少しふれたとおり、文学や美術は、個人的かつ社会的生活を可能にするような諸活動によって可能とされる。……建築、彫刻、絵画、音楽、そして詩は、たしかに文明生活の開花 (the efflorescence of civilised life) と称されるであろう。しかしながら、これらの諸芸術が、これら諸芸術の発達の基となった（このことはほとんど強調され得ていないのであるが）文明生活より上位に置かれるほど卓越した価値あるものと考えたとしても、なお、健全な文明生活の所産が第一

に考慮されなければならないこと、また、このような生活を促進する教養が最も高い位置を占めなければならないことが認められるであろう。⁽¹⁵⁾

いずれにせよ、スペンサーにおいては、芸術は、生活現象として、ないしは、社会現象として理解されていた。彼は「社会は諸個人よりなるものであり、社会において為された事柄はすべて諸個人の結合された諸行為によって為されたものである。それ故、個人の諸行為においてのみ社会現象の解明は見出されうる。しかし、諸個人の種々なる行為は、諸個人の本性の諸法則に基いている。だから、彼等の諸行為は、これらの諸法則が理解されてこそ、理解可能となる。しかしながら、最も簡明な表現をとれば、これらの諸法則は、一般的には身体と精神の諸法則の必然の結果であることが明らかとなる。かくして、生物学と心理学は、社会学の説明者として欠かせないということになる」⁽¹⁶⁾という。スペンサーの芸術の理論は、ここにも見出される個人の行為という観点を基礎として理解すべきである。彼は「第一原理」で次のように述べている。

この法則（進化の法則）は、社会有機体の進化において明瞭に例証されるのみならず、具体的なものであらうと抽象的なものであらうと、現実的なものにせよ、理想的なものにせよ、人間の思考と行為（thought and action）のすべての所産の進化においてもまた等しく明瞭に示される。⁽¹⁷⁾

芸術の諸領域及び言語などは、人間の思考と行為の所産として論じられたのである。‘社会的行為のすべての組織された諸結果、これらはすべて超有機的構造（super-organic structures）であるが、それらは（上記の進化の法則と）同様な諸相を通り抜ける。それらは、さまざまな主観的な過程による客観的な所産であるが、それらには、（進化の法則と）対応する諸変化が認められるにちがいない。言語、科学、芸術の諸事例が、まさにこのことを明らかに証明する’⁽¹⁸⁾。

スペンサーの芸術の理論は、社会的行為、ないしは、思考と行為の所産

である超有機的構造ともいふべき芸術を論じたものであるが、芸術にはいわば、客観的所産としての作品の様式や構造の側面と、主観的過程としての創造、伝達の側面とが見出されるから、われわれは、この点を考慮すべきである。同時に上述のようなスペンサーの論述とこの論述に対する筆者の理解から導き出されることは、芸術家の問題であり、芸術と言語、芸術と科学、それに芸術と宗教などの問題である。彼が芸術の諸領域で追求した基本的な原理は、進化の諸形式にほかならない。しかし、観点をかえると、彼が芸術の研究で試みた基本的課題は、芸術家及び享受者、作品の様式と構造、芸術の諸領域の相互関係、芸術現象と他の社会現象との関連性、芸術の社会的機能などの課題であったことは、明らかである。これらの課題は、今日の芸術社会学においても最も重要な研究課題とみなされるものである。芸術社会学研究史、理論史上におけるスペンサーの先駆者的地位をここに認め得る。

彼はシンボル、コミュニケーション、表現の諸問題についても注目し、言語及びこれとの関連を有する芸術の諸領域においてこれらの問題を論じている。また、特に文学の領域で芸術作品の流通のシステムを論じているが、作者、出版者、読者の相互的關係を作品の普及という角度で扱うこの立場は、文学社会学の主たる課題となるべきもので、スペンサーのかかる論及にあらためて眼を向けたい。スペンサーは、芸術を彼の社会学体系の中で扱う場合も、他の断片的な論述において扱う時も、広範囲にわたる芸術領域をとり上げている。これは、芸術の諸領域の相互関係を認め、未分化の段階から領域の分化という方向を考える彼の基本的立場による。

描かれた窓（ステンド・グラス）、その窓からの光が射している祈禱書、そしてその近くにある記念物、これらの間には密接な結びつきが見られる。⁽¹⁹⁾

彼は次のような例をも指摘する。

書かれた言語、絵画、彫刻のすべてのフォームの共通の根源は、古代

の寺院や宮殿の政治的宗教的装飾に認められるということは、奇妙な感じもするが、実はそれは真実である。⁽²⁰⁾

詩、音楽、舞踊の場合も、元来共通の起源が見られ、次第に分化したと解される。‘書かれた言語は絵画及び彫刻と結びついており、最初はこの三つは建築の付加物であり、すべての統治の第一次的形態である、神政的統治と直接結びついている’⁽²¹⁾と彼はいう。リズムについては、次のような論述が見られる。

話し言葉におけるリズム、音にみられるリズム、そして動作におけるリズムは、最初は同一なものの諸部分であった。われわれは、さまざまな現存する未開な諸部族の場合にそれらの結びつきの例を見出すのである。⁽²²⁾

スペンサーの芸術の理論は、芸術の諸領域の比較を通じて構成されているから、特殊芸術社会学と一般芸術社会学の諸関係を彼のかかる方法の検討によって考えることもできる。彼はエジプト、アッシリア、ギリシア、それにキリスト教芸術の諸事例をしばしばとり上げ、芸術の諸領域に見られる進化の諸相を考察しているが、これらの点に比較芸術社会学の観点を認めることもできよう。また、未開芸術に関する論述も彼の芸術の理論の中で注目すべきものであるが、これは、社会人類学や文化人類学の領域における未開芸術研究（いわば芸術人類学）との関連においても検討すべき内容を有している。スペンサーはこのような比較の方法を芸術現象の解明において使用し、芸術の諸領域、芸術家、芸術作品の各々について認められる進化、分化、統合、いわば、同質的なものから異質的なものへという基本的な変化の形式を明らかにしたのであった。

叙事詩、叙情詩、劇詩の詩人は、俳優と同様にめいめい彼等独自のやり方で心地良い感情をもたらし、生活を豊かにする。……また、造形芸術の領域で仕事を続ける人々、つまり画家、彫刻家、建築家は、彼等の作品によって、美的教養を有する人々（the aesthetic class）の心地良

い知覚や情緒をよびおこし、こうして生活を豊かにするのである。⁽²³⁾

スペンサーは、個人及び社会の生活維持のために生活の防備、生活の規制、生活の扶養といういわば諸機能の必要を説き、これらが達成されたとしたら、さらにどのような一般的機能があるだろうかと問う。この間に対する彼の答えは、生活の充実 (the augmentation of life) という機能の指摘である。スペンサーの説く芸術家の役割は、このような機能の促進と⁽²⁴⁾つながりを有するものであった。

注 (1) H. Spencer, *The Study of Sociology*, p. 386.

(2) *ibid.*, p. 386.

(3) *ibid.*, p. 69.

(4) *ibid.*, p. 63. マーシャル (T.H. Marshall) は、社会学の立場と社会のシステムを論じたところで、スペンサーのこの一節を紹介している。

T. H. Marshall, *Sociology at the Crossroads and other essays*, London: Heinemann, 1963, pp. 31-2.

(5) H. Spencer, *The Man versus the State* (Pelican Classics), pp. 201-5. (The Social Organism, first published in *The Westminster Review* for January 1860)

(6) *ibid.* (The Social Organism), p. 206.

(7) H. Spencer, *The Principles of Sociology* Vol. I, 1876, p. 466.

(8) *ibid.* (The Principles of Sociology Vol. I), pp. 467-77.

(9) *ibid.* p. 477.

(10) H. Spencer, *Essays on Education* p. 29. (What Knowledge is most Worth?)

(11) *ibid.* (What Knowledge is most Worth?) p. 28. 社会学研究 (*The Study of Sociology*, American edition, 1891) のアメリカ版への序文 (by E. L. Y.) においては、ここで筆者の紹介した一節を含めてこの論文が長文にわたり引用されている。pp. iv-vi.

(12) *ibid.* (What Knowledge is most Worth?) p. 29.

(13) H. Spencer, *First Principles of a New System of Philosophy*, p. 396.

(14) H. Spencer, *Essays on Education* p. 7. (What Knowledge is most Worth?)

(15) *ibid.* (What Knowledge is most Worth) pp. 30-1.

(16) *ibid.* pp. 29-30.

(17) H. Spencer, *First Principles*....., p. 347.

- (18) *ibid.*, p. 374.
- (19) H. Spencer, *Essays: Scientific, Political, and Speculative*, 1858, p. 20. (Progress: Its Law and Cause, *The Westminster Review*, April 1857) これと全く同じ表現の文章が、「第一原理」の p. 352 に見られる。
- (20) H. Spencer, *First Principles*....., p. 352.
- (21) H. Spencer, *Essays*....., p. 17. (Progress: Its Law and Cause)
- (22) *ibid.*, p. 22. これと同様な論述は、「第一原理」の p. 354 にも見られる。
- (23) H. Spencer, *The Principles of Sociology* Vol. III, 1896, p. 180.
- (24) *ibid.*, p. 180.

4 む す び

ハーバート・スペンサーの社会の理論と芸術の理論は、生活現象たる社会現象という観点に基いて相互媒介的に論じられるものである。芸術現象は、一方では個人の行為と関連し、他方では社会の構造と機能とに関連性を有する。このような立場をとるスペンサーは、比較研究の方法を援用しながら、芸術家、芸術作品、芸術の社会的機能などに論及しているが、彼のかかる研究領域には、芸術社会学の基本課題が認められる。

彼が究極的に意図したことは、社会の発展、構造、機能の解明であった。特に進化の法則の究明が試みられ、社会に対し、また人間の思考と行為の所産に対し、この法則の適用が行なわれたのである。彼によれば、‘叙唱ないしは音楽的朗唱は、すべての点で話し言葉と歌唱の中間に位置づけられる⁽¹⁾’ものとされており、音楽の根源は、情緒的言語 (emotional language) に求められたのである。また、彼は、‘情緒的言語の発展を促進することが音楽の機能だとすれば、音楽は、より高い幸福を成就するための助けとみなされる⁽²⁾’と述べる。彼はあるところで、‘書くことと印刷することは、⁽³⁾ 絵画的言語 (picture-language) から派生してきたものである’⁽³⁾とも論じている。次の機会においては、スペンサーの言語に関する所説を述べ、今回ここで指摘した彼の芸術の理論を細部にわたって考察したい。

スペンサーが「ウェストミンスター評論」(*The Westminster Review*)

に「進歩、その法則と原因」と題する論文を発表したのは、1857年であり、同誌に「社会有機体」と題する論文が、掲載されたのは、1860年のことであつた。そして1876年にいたり「社会学原理」の第一巻が刊行された。それからおよそ百年の歳月が流れた。社会学の古典とされるスペンサーの諸研究の中に今日の問題を発見し、それを再考し、批判し、摂取することは、われわれに等しく課せられた課題であろう。 (1970年11月23日稿)

注 (1) H. Spencer, *Literary Style and Music*, London: Watts & Co., 1950, p. 63. (The Origin and Function of Music, *Fraser's Magazine*, October 1857)

(2) *ibid.*, p. 75.

(3) H. Spencer, *Essays on Education*, Everyman's Library, p. 264. (On the Genesis of Science, *British Quarterly Review*, July 1854)

〔附記〕 本稿は、福沢諭吉記念慶応義塾学事振興基金による研究の一部である。

Art and Society Sociology of Art by Herbert Spencer

Takeshi Yamagishi

Résumé

In this paper I try to understand the main problems of theories of society and art in works written by Herbert Spencer (1820-1903). He was really a man of Victorian England. The Victorian Age was the 'age of coal and iron' or 'the Railway Age' and it was characterized by constant and rapid change in economic circumstance, social custom, and intellectual atmosphere, so the nineteenth century was an age of transition. We may find in his writings his attitude to his age and changing way of life in England.

He once explained the aim of Sociology (the Social Science) as

follows: 'Sociology has to recognize truths of social development, structure, and function, that are some of them universal, some of them general, some of them special'. (The Study of Sociology, p. 59) He thought that all social phenomena are phenomena of life. Also he regarded society as a growth and not a manufacture.

He used next terms frequently and these may be called 'key terms' analyzing his theories of society and art. Some examples are as follows: *Social organism, evolution, growth, development, structure, function, co-operation, consensus, class, the sustaining system, the distributing system, the regulating system, social metamorphoses, homogeneity, heterogeneity, differentiation, integration etc.*

For him the the law of progress or evolution is not only clearly exemplified in the evolution of the social organism, but also it is exemplified with equal clearness in the evolution of all products of human thought and action such as language, art, and science. Then he surveyed and traced such law or principle as differentiation and integration in various artistic phenomena, for example in artist, style and structure of works, interrelation between arts.

He thought that 'in ancient Egypt, the priest was the primitive sculptor; and the association of painting with sculpture was so close as to imply that he was also the primitive painter—either immediately or by proxy'. (The Principles of Sociology Vol. III, p. 302) Or in another page we can find next passage. 'Along with differentiation of the lay painter from the clerical painter there began a differentiation of lay painters from one another.' (ibid., p. 307)

In some articles he argued function of art and role of artist. Also he discussed distributing system of literary works, in another word 'book-distribution.'

Here and above I can find main problems and methods of sociology of art, then Herbert Spencer may be called one of founders of so-called sociology of art, sociological or anthropological study of art.